

# 死の接吻

小酒井不木

青空文庫



その年の暑さは格別であった。ある者は六十年来の暑さだといひ、ある者は六百年来の暑さだと言つた。でも、誰も六万年来の暑さだとは言わなかつた。中央气象台の報告によると、ある日の最高温度は華氏百二十度であつた。摂氏でなくて幸福である。「中央气象台の天気予報は決して信用出来ぬが、寒暖計の度数ぐらひは信用してもよいだろう」と、あほうどり信天翁の生殖器を研究して居る貧乏な某大学教授が皮肉を言つたという事である。

東京市民は、耳かくしの女もくるめて、だいぶ閉口したらしかつた。熱射病に罹かかつて死ぬものが日に三十人を越した。一日に四十人ぐらひ人口が減じたとして大日本帝国はびくともせぬが、人々は頗すこぶる気味を悪がつた。何しろ、雨が少しも降らなかつたので、水道が一番先に小咳こせきをしかけた。日本人は一時的の設備しかない流儀であつて、こういう例外な暑い時節を考慮のうちに入れないで水道が設計されたのであるから、それは当然のことであつた。そこで水が非常に貴重なものとなつた。それは然しかし、某大新聞が生水宣伝をしたためばかりではなかつた。氷の値が鰻上りに上つた。N製氷会社の社長は、喜びのあまり

脳溢血を起して即死した。然し製氷会社社長が死んだぐらいで、暑さは減じなかつた。

人間は例外の現象に遭遇すると、何かそれが不吉なことの起る前兆でもあるかのよう  
に考えるのが常である。だから、今年のこの暑さに就て、論語しか知らない某実業家は、  
生殖腺ホルモンの注射を受けながら、「日本人の長夜の夢を覚醒させるために、天が警  
告を発したのだ」という、少しも意味をなさぬことを新聞記者に物語り、自分は自動車で  
毎晩妾の家を訪ねて、短夜の夢を食った。由井正雪が生きて居たならば、品川沖へ海軍飛  
行機で乗り出し、八木節でもうたつて雨乞をするかも知れぬが、今時の人間は、なるべく  
楽をして金を儲けたいという輩ばかりで、他人のためになるようなことはつとめて避けよ  
うとする殊勝な心を持つて居るから、誰も雨乞いなどに手出しをするものがなかつた。従  
つて雨は依然として降らず、人間の血液は甚だ濃厚粘稠になり、喧嘩や殺人の数が激  
増した。犯罪を無くするには人間の血液をうすめればよいという一大原則が、某法医学者  
によつて発見された。兎に角、人々は無闇に苛々するのであつた。

その時、突如として、上海に猛烈な毒性を有するコレラが発生したという報知が伝  
わつた。コレラの報知は郭松齡の死の報知とはちがひ、内務省の役人を刺戟して、船  
舶検疫を嚴重にすべき命令が各地へ発せられたが、医学が進めば、黴菌だつて進化する筈

であるから、コレラ菌も、近頃はよほどすばしこくなつて検疫官の眼を眩まし、易々として長崎に上陸し、たちま忽ち由緒ある市中に拡がった。長崎に上陸しさえすれば、日本全国に拡がるのは、コレラ菌にとつて訳のないことである。で、支那人の死ぬのに何の痛痒を感じなかつた日本人も、はげしく恐怖し始めた。然し黴菌の方では人間を少しも恐怖しなかつた。各府県の防疫官たちは、自分の県内へさえ侵入しなければ、ほかの県へはいくら侵入してもかまわぬという奇抜な心懸けで防疫に従事し、ことに横浜と神戸は、直接 シヤンハイ上海から黴菌が運ばれて来るので、ある防疫官は、夫人が産氣づいて居る時に出張命令を受けて、生れる子を見届けずに走り出した。

が、防疫官たちのあらゆる努力も効を奏しないで、コレラは遂に大東京に入りこんだのである。いつもならば京橋あたりへ、薪炭しんたんを積んで来る船頭の女房が最初に罹るのであるのに、今度の流行の魁さきがけとなつたのは、浅草六区のK館に居るTという活動弁士であつた。ハロルド・ロイドの「防疫官」と題する喜劇を説明して居るとき嘔吐おうとを催おしたのであるが、真正のコレラであると決定した頃には、ぎつしりつまつて居た観客は東京市中に散らばつて、防疫の責任を持つ当局の人々は蒼くなつたけれども、もはや後の祭であつた。

疫病は破竹の勢で東京の各所に拡がった。毒性が極めて強かつたためであらう、一回や

二回の予防注射は何の効も奏せず、人々は極度に恐怖した。五十人以上の職工を有する工場は例外なく患者を出して一時閉鎖するのやむなきに至った。暑さは依然として減退しなかつたので、飲んでではならぬという氷を敢て飲むものが多く、さような連中はみごとにころりころりと死んで行つた。皮肉なことには医師がだいぶ懼つた。平素それ等の医師から高い薬価を請求されて居る肺病患者は、自分自身の病苦を忘れて痛快がった。やがて死ぬべき運命にあるものは、知つた人の死をきくと頗る痛快がるものである。

どこの病院も伝染病院を兼ねさせられ忽ち満員になつてしまつた。焼場が閉口し、墓場が窮屈を感じた。葬式はどの街にも見られた。日本橋の袂たもとに立つて、橋を渡る棺桶の数を数える数奇者すきしやはなかつたが、仕事に離れて、財布の中の錢を勘定する労働者は無数であつた。

恐怖は大東京の隅々まで襲つた。あるものは恐怖のために、生きようとする努力を麻痺せしめて自殺した。あるものは同じく恐怖のために発狂して妻子を殺した。又、精神の比較的健全な者も、種々の幻覚に悩んだ。たといそれが白昼であつても、白く塵ちりにまみれた街路樹の蔭に、首を吊つて死んで居る人間の姿を幻視した。沉いんや、上野や浅草の梵ぼんしよ鐘うが力なく響き渡つて、梟ふくろの鳴き声と共に夜の帷とばりが降りると、人々は天空に横わる銀河

にさえ一種の恐怖を感じ、さつと輝いてまた忽ち消える流星に胸を冷すのであった。なまぬるく静かに動く風の肌ざわりは、死に神の呼吸かと思われた。

けれども、さすがに近代人である。疫病が「猖獗」という文字で形容された時代ならば、当然「家々の戸はかたくさしこめられ、街頭には人影もなく」と書かるべきであるのに、その実、それとは正反対に、人々は身辺にせまる危険を冒して外出し、街は頗る雑沓した。夜になると外気の温度が幾分か下降し、蒸されるような家の中に居たたまらぬという理由もその一つであったが、主なる理由は近代人の絶望的な、宿命論的な心の発現であった。恐怖をにくみながら、恐怖に近づかず<sup>お</sup>に居られないという心は近代人の特徴である。彼等は釣り出されるようにして外出した。然し、外出はするものの彼等の心は彼等を包む夜よりも遥かに暗かった。平素彼等の武器として使用されて居る自然科学も、彼等の心を少しも晴れやかにしなかった。従つて彼等は明日にも知れぬ命を思つて、せめて、アルコホルによつて一時の苦悶を消そうとした。だから、バアやレストオランが常に繁昌した。彼等は歌つた。然し彼等の唄は道行く人の心を寒からしめた。その昔ロンドンでペストが大流行をしたとき、棺桶屋に集つた葬式の人夫や薬劑師たちが商売繁昌を祝つてうたう唄にも似て物凄い響を伝えた。

人々を襲つた共通な不安は、却つて彼等の個々の苦惱を拡大した。疫病の恐怖は借金の重荷を軽減してはくれなかつた。また各人の持つ公憤や私憤を除いてはくれなかつた。しかのみならず公憤や私憤は疫病恐怖のために一層強められるのであつた。従つて暑さのために激増した犯罪はコレラ流行以後、急加速度をもつて増加するのであつた。

## 二

本篇の主人公雉本静也きしもとしずやが、失恋のために自殺を決心し、又忽ちそれを翻えひるがして、却つて殺人を行うに至つたのも、こういう雰囲気の然らしめたところである。

静也は、東京市内のM大学の政治科を卒業し、高等下宿の一室に巢喰いながら、国元から仕送りを受けて、一日中を、なすこともなくごろごろして暮して居るといふ、近代に特有な頽廢人たいはいじんであつた。アメリカには美爪術メニキュアを行つて日を送る頽廢人が多いが、彼も、髪をときつけることと、洋服を着ることに一日の大半を費した。彼は何か纏まとまつた職業に従事すると、三日目から顛頂骨てんちやうこつの辺がずきりずきりと痛み出すので一週間と続かなかつた。彼はいつも、頭というものが、彼自身よりも賢いことを知つて、感心するのであつた。



又、彼は何をやってもすぐ倦あいてしまった。時には強烈な酒や煙草を飲み耽ふけつたり、或は活動写真に、或は麻マージャン雀ハシに、或はクロス・ワード・パズルに乃至は又、センセーショナルな探偵小説に力を入れても見たが、いずれも長続きがしなかつた。彼はこの厭あき性しよを自分ながら不審に思つた。そうして、恐らく自分の持つて生れた臆病な性質が、その原因になつて居るだろうと考えるのであつた。

近代の頹廢人には二種類ある。第一の種類に属するものは、極めて大胆で、死体に湧く青蠅あおばえのように物事にしつこい。第二の種類に属するものは、極めて臆病で、糊のりの足らぬ切手のように執着に乏しい。静也はいう迄もなく、この第二の種類に属する頹廢人であつた。かれはバアやカフエーの女と話すときにすら、一種の羞恥を感じた。だから彼は今まで一度も恋というものを経験しなかつた。彼にとつては、恋することは一種の冒険であつた。心の中では冒険してみたくてならなかつたけれども、彼の臆病心が邪魔をした。それに彼の瘦せた身体が、冒険には適おして居らなかつた。

ところが、運命は彼に恋する機会を与えたのである。即ち、彼は生れて初めての恋を経験するに至つたのである。然し皮肉なことは、彼の恋した女は、彼の友人の妻君であつた。それは皮肉であると同時に、彼にとつて不幸なことであつた。彼にとつて不幸であるばかり

りでなく、その友人にとつても不幸なことであつた。実に、彼の友人は、それがため、何の罪もなく彼のために殺さるべき運命に導かれたといつてもよいからである。古来、妻が美しかつたために、不慮の死を招いた良人は少くなかつたが、静也の友人 佐々木京助のように、何にも知らずに死んで行つたのは珍らしい例であるといわねばならない。

佐々木京助の妻敏子は所謂新らしい女即ち新時代の女性であつた。新時代の女性の通性として、彼女は男性的の性格を多分に具え、理性が比較的發達して居た。彼女の容貌は美しく、態度がきびきびして居た。そうした彼女の性格が女性的分子の多い静也を引きつけるのは当然であつた。静也は京助を訪ねる毎に、敏子の方へぐんぐん引きつけられて行つた。

京助は彼と同級生で、今年の春敏子と結婚し、郊外の文化住宅に住つて居た。彼は別にこれという特徴のない平凡人であつた。平凡人の常として、彼はふとつて、鼻の下に鬚を貯えて居た。然しその平凡人であるところが新時代の女性には氣に入るらしい。實際また、京助のような平凡人でなくては、新時代の女性に奉仕することは困難である。その証拠に、ある天才音楽家は新らしい女を妻として、帝国劇場のオーケストラで指揮をして居る最中に俄然卒倒した。招かれた医師は、患者のポケットに、一回一錠と書かれた薬

劑の瓶を発見して、その卒倒の原因を確めることが出来た。又、ある代議士は、議会で八百万円事件というのにかんれん関聯して査問に附せられた。彼は衆議院の壇上で、「嘘八百万円とはこのことだ」と、苦しい洒落を言つて、その夜インフルエンザに罹つた。いずれにしても新しい女を妻とするには、身命を投出す覚悟がなくてはならない。

京助が、果してそういう覚悟を持つて居たかどうかはわからぬが、彼の体力と金力とは敏子を満足させることが出来たと見え、二人の仲は至つてよかつた。然し敏子は、持ちまえの、コケツチツシユな性質をもつて、良人の友人を待遇したから、静也はいつの間にか妙な心を起すに至つたのである。といつて静也はその妙な心を、どう処置してよいかわからなかつた。静也が若し臆病でなかつたならば、或はあつさり敏子に打あけることが出来たかも知れない。然し、臆病な人間の常として、結果を予想して、色々と思ひ迷うものであるから、静也は打ちあけたあげくの怖ろしい結果を思うと、どうしても口の先へ出すことが出来なかつた。だから、一人で胸を焦こがして居るより外はなかつたのである。

とはいへ、段々恋が膨脹して来ると、遂には破裂しなければならぬことになる。静也は、どういふ風に破裂させたものであろうかと頻しきりに考えたけれども、もとより名案は浮ばなかつた。いつそ、思ひ切つた手紙でも書いたならばと考えたけれど、字はまずいし、文章

は下手であるし、その上手紙というものは、時として後世にまでも残るものであるから、それによつて、永遠にちようしやう嘲笑ちやうしやうの的になるのは厭であつた。阿倍仲麻呂あへのなかまろが、たった一つ和歌を作つただけであるのに、その一つを、疝氣せんき持ちの定家さだいえに引奪ひつたくられ、後世「かるた」というものとなつて、顔の黄ろい女学生の口にかかつて永久に恥をさらして居る。又、手紙故に、「珍品」という綽名あだなを貰つて腎臓炎を起した一国の宰相もある。そう考えると、静也は手紙を書くのが恐ろしくてならなかつた。

静也が恋の重荷に苦しんで居るとき、突如として、コレラが帝都を襲つたのである。すると不思議なことに、臆病な静也は急に大胆になつた。そうして、敏子の前に恋を告白しようとしたのである。恋とコレラとの關係については、まだ科学的な研究は行われて居ないようであるが、若し研究したい人があるならば、静也は、誠に適当な研究材料であるといつてよい。

大東京に恐怖の色が漂つて居たある日、静也は京助が会社へ行つて居る留守に敏子をたずねた。そうして静也は、演説に馴れない人が、拍手に迎えられて登壇するときのように、ボーツとした気持になつて、生れて初めて恋の苦しみを味わつたこと、言わなければとても堪えられぬので思い切つて告白することなどを、敏子に向つて語つたのである。

その日はやはり非常に暑くて、暑いための汗と、恥かしきの汗とで、静也は多量の水分を失い、告白の最後には声が嘎しわがれてしまつて、まるで、死にともない老婆が、阿弥陀如来の前で、念仏を唱えて居るような心細い声になつた。

敏子は臣下しんかの哀願をきいて居るクイーンのような態度で、静也の告白をきいて居たが、静也が語り終つて手巾ハンカチで頸筋を拭うと、手にもつて居た団扇うちわで静也をふわりと一度おつて、甲高い声を出した。

「ホホホホ、何をいつてるの、馬鹿らしい。ホホホホホ」

### 三

落下傘を持たずに、三千尺じやくの高空から突き落された飛行士のような思いをした雫本静也は、その夜、下宿に帰つてから、自殺しようと決心した。犯罪学者は、自殺の原因に暑気を数えるけれども、静也は暑いから自殺するのではなく、失恋したから自殺することにしたのである。尤ももつと、彼に自殺を決心せしめた動機には、やはりコレラを数えないわけにはいかない。人がどしどし死ぬときに、何か悲惨な目に出逢うと、気の弱い人間は自殺をし

たがるものである。

さて、静也は自殺を決心したものの、どういう手段によって自殺したらばよいかということに甚だ迷ったのである。そうして自殺した後、何だか自殺したといわれるのが恥かしいような気持にもなった。出来るならば、自殺しても自殺したとは思われぬような方法を用いたとも思った。そう考えて居るうち、以前、ある薬局の二階に下宿して居たときに手に入れた亜硫酸<sup>あひさん</sup>を思い出した。亜硫酸をのめば皮膚が美しくなるということは何処<sup>どこ</sup>かで聞いて来て、薬局の人に話して貰い受けたものである。その後いつの間にか、亜硫酸をのむことをやめたが、その残りがまだ罌<sup>びん</sup>の中に入れて、机の抽斗<sup>ひきだし</sup>の奥に貯えられてあったのである。すべて人間は、一旦毒薬を手に入れると、それが危険なものであればある程手離すことを惜しがるものであつて、従つて色々の悲劇発生のもとになる。静也も別に深い意味があつて亜硫酸を貯えて居たわけではないが、それが、今、どうやら役に立ちそうになつて来た。

静也は机の抽斗をあけて、亜硫酸の小さな罌を取り出した。そうして白い粉末をながめたとき彼の全身の筋肉はほんの一次的ではあるが硬直したように思われた。彼はその時、こんなことで果して自分は自殺し得<sup>う</sup>るだろうかと思つた。彼はまた亜硫酸をのむと、どん

な死に方をするかを知らなかった。あんまり苦しくては困ると思った。又なるべくなら、死後、自殺したように思われぬものであつてほしいとも思った。そこで、彼は図書館へ行つて、一応亜砒酸の作用を調べて見ようと決心した。

上野の図書館は、コレラ流行時に拘かかわらず、意外に賑つて居た。死神が横行するとき、読書慾の起るのは古来の定則である。彼は毒物のことを書いた書物を請求したが、驚いたことに日本語で書かれた医書は悉ことごとく貸し出されて居た。「やっぱり、みんな生命が惜しいからであろう」と、考えると、彼は、生命を捨てるために医書を読みに来た自分を顧みて苦笑せざるを得なかつた。仕方がないので彼は英語の薬理学の書を借りて、貧弱な語学の力で、亜砒酸の条を辛うじて読んだ。

すると意外にも、亜砒酸の症状は、コレラの症状に極めてよく似て居ると書かれてあつた。彼はこれを読んだとき、すばらしい発見でもしたかのように喜んだ。何となれば、亜砒酸をのんで自殺したならば、こういうコレラ流行の時節には、必ずコレラと間違えられるにちがひなく、従つて自殺しても自殺だとは思われなからである。医師というものは誤診するために、神様がこの世に遣されたものであるらしいから、亜砒酸で死ねば必ずコレラで死んだと間違えられる。こう思うと、静也は試みに、亜砒酸をのんで自殺し、医学

そのものを愚弄してやりたいような気にもなった。

ところが段々読んで行くうちに、亜砒酸は激烈なる疝痛せんつうを起すものであると知って、少しく心が暗くなつて来た。コレラと亜砒酸中毒との區別は主としてこの疝痛の有無によつてなされると書かれてあつたので、いつそコレラに罹ろうかとも思つて見たが、コレラで死んではあまりに平凡な気がしてならなかつた。といつて激烈な疝痛に悩むのも厭になつた。疝痛に悩むのが厭になつたばかりでなく、自殺することさえ厭になりかけて来た。

で、彼は図書館を出て、公園を歩いた。白い土埃が二寸すんも三寸ずんもたまつて居て、暑さは呼吸困難を起させるくらいはげしかつた。彼は木蔭のベンチに腰を下して、さて、これからどうしたものであろうかと考えて居るとき、ふと、面白い考えが浮んだ。

「自分が死ぬよりも、誰かに代つて死んで貰つた方が、はるかに楽である」

と、彼は考えたのである。いかにもそれは愉快な考えであつた。そう考えると彼はもう自殺するのがすつかり厭になつた。自殺しようとした自分の心がおかしくなつて来た。そうして急に人を殺して見たくなつた。ことに愉快なことは、今、亜砒酸を用いて毒殺やを行つたならば、医師は前述の理由で、コレラと診断し、毫ごうも他殺の疑を抱かないに違いない。自分で死んで医学を愚弄するよりも、自分が生きて居て医学を愚弄した方がどれだけ愉快



であるかも知れない……。こう考えると静也は、うれしさにその辺を駈けまわって見たいような気がした。

彼は下宿に帰ってから、然らば一たい誰を殺そうかと考えた。すると、彼の目の前に下宿の主婦おかみのあぶらぎった顔が浮んだ。彼は自分が痩せて居たために、ふとった人間を見ると癩しやくにさわった。そこで彼は下宿屋の主婦おかみを槍玉にあげようかと思つたが、あんな人間を殺しても、なんだか物足りないような気がした。

段々考えて居るうちに、彼は突然、友人の佐々木京助を殺してはどうかと思つた。彼は、京助のふとつて居ることがいつも氣に喰わなかつたが、ことに、京助の顔は、この世に居ない方がいいというようなタイプであつたから、京助を犠牲にすることが一ばん当を得て居るように思われた。尤ももつと、敏子に対する腹癒はらひせの感情も手伝つた。綺麗さっぱりとはねつけられた返礼としては正に 屈くつきょう 竟の手段であらねばならぬ。

こう決心すると、彼は非常に自分の命が惜しくなつて来た。殺人者は普通の人間よりも一層生に執着するものだという誰かの言葉がはじめて理解し得られたように思つた。殺人を計画するだけでさえ生に対する執着がむらむらと起るのであるから、殺人を行やつたあげくにはどんなに猛烈に命が惜しくなるだろうかと彼は考えるのであつた。良心の苛かしやく責な

どというものも、要するところは、生の執着に過ぎぬかも知れない。こうも、彼は考えるのであった。

然し、殺人を行うのは、自殺を行うとちがつて、それほど容易ではない。どうして京助を毒殺すべきであろうか。これには流石さすがに頭をなやまさざるを得なかつた。然し、彼は京助の性格を考えるに至つて、その問題を容易に解決した。京助は平凡人である。だから、平凡人を殺すにふさわしい平凡な方法を用うればそれでよい。と、彼は考えたのである。

先ず、会社へ行つて京助を連れ出し、二人で西洋料理屋にはいり、ビーフステーキを食べる。京助は肉に焼塩をかけて食う癖があるから、その焼塩の中に亜砒酸をまぜて置けばそれでよい訳である。あらかし予め、料理店で使用するような焼塩の罫を買つて、焼塩と亜砒酸とをまぜて入れて置き、それを持参して、いざ食卓に就くというときに、料理店の罫とすり替える。……何と簡単に人間一匹が片附くことだろう。

普通の時ならば、亜砒酸中毒はすぐに発見される。然し時節が時節であるから、決して発見される虞おそれはあるまい。彼は医師の腕に信頼した。平素人殺しをする医師諸君は、こういう時でなければ人助けをする機会がない。して見れば自分は医師にとっての恩人となることが出来る。何という愉快なことであろう。などと考えて、彼は殺人者が殺人を執行す

る前に陥る陶酔状態にはいるのであった。

#### 四

殺人を決意してから十日の後、亜硫酸をまぜた焼塩の罎をポケットに入れた静也は、京助の会社をたずねて、京助を何の苦もなく連れ出すことが出来た。静也は、若しや敏子が例の一件を京助に話しては居ないかと心配したけれども京助に逢って見ると、そんな様子は少しもなかった。又静也が、一しよに西洋料理を食べようと言い出した時にも、何の疑惑も抱かなかつた。平凡人の特徴は物事に不審を起さぬことである。実際また彼は、物事に不審を抱くほど瘦せた身体の持主ではなかつた。だから殺されるとは知らずに、平気で静也について来たのである。

静也はもとより行きつけのレストランへは行かなかつた。知った家で人殺しをするということは、あまり気持がよくないだろうと思つたからである。京助はもとよりこれに就いても不審を抱かなかつた。そうして雪せっぽく白きの布きれのかかつて居るテーブルに着いて、ビーフステーキを食べた。京助が手を洗いに行つた間に静也がすり替えて置いた焼塩の罎を、京

助は極めて自然にとりあげて牛肉の上に、而も大量にふりかけた。そうしていかにも美味しそうに食べた。二片三片食べたとき、京助は腹の痛そうな顔をして眉をしかめたので、静也ははつと思つたが、然しその後は何ともなく、食事は無事に済んだ。食事が済むと二人は早速勘定を払つて立ち上つた。その時、静也は京助に気附かれずに、再び、もとの鑿とすり替えた。ところが、戸外へ出ると程なく、京助は前こごみになつて立ちどまり苦痛の表情をしたので、静也は、京助にすすめて、其処そこに立たせ、街角へ走つてタクシーをよび、京助を家に帰らせたのである。

京助と別れて下宿に戻つた静也は、可なり興奮し、そうして、意外に疲労して居ることを感じた。レストオランで京助の一举一動を緊張してながめて居たときは、全身の筋肉がぶるぶる顫えた。そうして心臓が不規則に搏ち出したような気がした。今、下宿へかえつてからでも、なお胸の動悸は去らなかつた。で、彼は畳の上へぐつたりとして寝ころんだが、それと同時に一種の不安が彼を襲つた。

果して医師がコレラと診断するであろうか。

ここまででは自分の手で首尾よく事を運んで来たが、これ以上は他人の手を待たねばならない。万が一にも、医師が誤つて、正しい診断を下したならば、それこそ、あまり呑気に

しては居おられない。と考えると、何だかじつとしては居おられぬ気持になり、つと立ち上つて畳の上をあちらこちら歩いたが、今更、何の施すべき手段はなかった。

いくら暑い夜よでも、今までは一晩も眠れぬことはなかったのに、その晩は妙に暑さが気になつて、暁方に至るまで眠られなかった。然し、彼が眼をあいた時には、夏の日がかんかん照つて居た。彼は朝飯をすますなり、飛び出すようにして郊外の京助の家の附近にやつて来た。果して京助の家は、貼紙をして閉ざれてあつた。近所で聞いて見ると京助は昨夜コレラを発して死に、奥さんと女中は隔離されたということであつた。然し敏子と女中とが何処どこに居るかを誰も知るものがなかった。

静也はほつとした。自分の医師に対する信頼が裏切られなかつたことを知つて、甚だ、くすぐつたい気がした。そうして、世の中が案外住みよいものであることを悟つて、生に対する執着が一層深められて行つた。深められて行くと同時に敏子に対する恋もたが頭を擡もたげ始めた。彼は敏子に急に逢いたくなつた。逢つてもう一度、彼女の反省を乞おうと思つた。彼は死んだ京助に対しては少しの同情をも感じなかつた。そうして京助が死んだ以上、敏子も、この前のような、呆気ない態度には出るまいと思ひ、一日も早く敏子に逢いたいと思つた。

けれど敏子の行方ゆくさきは誰も知らなかった。あんまり深入りしてたずねるのも気がひけたので、彼は敏子が帰るまで毎日訪ねて来て様子を見ることにした。

五日過ぎ、七日過ぎても敏子の家は閉されたままになって居た。逢えぬと思うと益々逢いたくなくなった。漸ようやく二週間目に、彼は敏子が帰って来て居ることを知ったが、日中、何となく恐ろしいような気がしたので、夜になるのを待ちかねて、久し振りに、馴染の深い玄関のベルのボタンを心臓の動悸を高めながら押すのであった。

## 五

「まあ、雫本さん、よく来てくれました。きつと来て下さるだろうと思つて待つて居たのよ」

と、敏子は自分で玄関まで出迎えて、嬉しそうな顔をして言った。彼女は幾分類いくぶんかがこけて居たが、そのため却つて美しさを増した。

静也は、眼を泣きはらした顔を想像して居たのであるから、彼女のこの言葉に頗すこぶる面喰つて、何と云つてよいか迷つた。

「今晚、女中は居りませんの、ゆつくり遊んでいらしてもよいでしょう、御上りなさい」  
 こう言つて彼女は、あかるく電灯に照された応接室へ、静也を引摺るようにして案内した。静也は籐椅子に腰を下し、手巾ハンカチで汗をふいてから、

「時に……」

と、いいかけると、彼女はそれを遮つて言った。

「御くやみを述べて下さるのでしよう。有難いですわ。でも、人間の運命というものはわからぬものですね、佐々木はあの夜、あなたと一しよにレストオランへ行つて、同じものを食べながら、あなただけは、このように無事なものですもの……」

敏子が静也の顔を見つめたので、静也はあわてて、まぶしそうに眼たたきをした。敏子は更に言葉を続けた。

「佐々木はあの夜家に帰るなり、はげしい吐瀉としゃを始めて三時間たたぬうちに死にましたわ。まるで夢のようねえ」

「本当にそうです」と静也ははじめて口をきくことが出来た。「あのあくる日、気になつたものですから、こちらを御訪ねすると、佐々木君が死んだときいてびっくりしました。御見舞しようと思つてもあなたの行先がわからず、あれから毎日こちらへ来て見たのです。

二週間とは随分長い隔離ですねえ」

「そうよ、わたし病院で予防注射を受けて居ましたの。あなたは注射をなすって？」

「いいえ、一回や二回の注射では駄目だということで、面倒ですからやめました」

敏子はそれをきくと、何思ったか、急にその眼を輝かせた。

「一回や二回ではきかなくても、十回もやれば、黴菌をのみ込んだって大丈夫だそうだわ。わたし、毎日一回宛十回ほど注射して貰ったのよ。あなただって、佐々木のように死にたくはないでしょう？」

「佐々木君が死んだときいてから、急に死にたくなくなりました」

こう言つて静也は意味あり気な眼付をして敏子をながめた。

「それじゃ、その以前は死にたかつたの？」

静也はどうした訳か、急に顔がほてり出したので、伏目になって黙って居た。

「ね、仰おっしいよ」

静也は太息ためいきをついた。

「実は、この前御目にかかつてから、自殺しようと思ひました」

「どうして？」



「失望して」

「何を？」

「何をつてわかつてるじゃありませんか」

こう言つて彼は、小学生徒が先生の顔を見上げる時のようにおすおす敏子をながめた。二人の視線がぶつかった。敏子はうつむいて、黙つて手巾ハンカチで口を掩おおつた。

「どうしたのですか。佐々木君が死んで悲しいのですか？」

敏子が顔をあげてじろりと静也をながめた。その眼は一種の熱情に輝いて居た。

「わたし、恥かしくなつたわ」こういつて又も俯向いて、声を低くして言った。「この前、あなたにあんな心にもないことを言つたので……」

静也ははつとした。

「そ、それでは敏子さんは……」

「佐々木に済まないけれど……」

静也は熱病に罹つたような思いをして、ふらふらと立ち上つて敏子の椅子に近よつた。

「敏子さん、本当ですか？」と言つて彼は彼女の肩に手をかけた。ふくよかな触感が、彼の全身の神経をぴりりと揺ぶつた。

「あなた、電灯を消して下さい」と敏子は恥かしそうに言った。

静也は応接室の入口に備え付けてあるスイッチのところへよろよろ歩いて行って、パチンと捻った。

闇が二人を包んだ。

それから……接吻の音。

## 六

恋を語るには暗い方がよい。これは誰でも知って居ることである。

あけ放たれた窓から、なまぬるい空気が動いて来る。二人は暑かった。

接吻の後……男は辛抱がなかった。

女は四時間待って下さいといった。

四時間！ 何故？

その四時間は静也にとって、「永久」に思われた。

然し、その長い四時間も過ぎた。夏の夜は更けた。

すると男は暗黒の中で奇妙な声を出した。それは全くその場にふさわしからぬものであった。

「アツ！」

嘔吐おうとの声。

「うーん」

嘔吐おうとの声。

「ホ、ホ、ホ、ホ、ホ」女の甲高い声が暗の中に響き渡った。「よくも、よくも、あなたは佐々木を毒殺しましたね？ 卑怯ひきようなもの！ わからぬと思ったのは大間ちがい、佐々木

は予防注射を何回も受けたのよ……」

「あーっ」と腹の底をしぼるような声。

嘔吐おうとの声。

「だから、わたしはすぐ覺つたわ。けれど、佐々木は毒殺されたとは知らないで死んだのよ。死ぬ人の心を乱してはいけないと思って、わたしも御医者さんが誤診したのを幸いに黙って居たわ。だから、佐々木は予防注射をしてもきかなかつたのだと思って死んで行つたわ……」

嘔吐の声。

「それに、わたしは、あなたを警察の手に渡したくなかったのよ。警察の手に渡れば、死刑になるやらならぬやらわからぬでしょう。わたしは、一日も早く自分で復讐しようと思つたのよ、だから、昨日まで予防注射をしてもらつて生きてた黴菌を管<sup>な</sup>めても病気にかからぬ迄になつたのよ。先刻、あなたが電灯を消しに行った間に、病院から黙って持つて来た試験管の、生きた黴菌を口に入れたのよ。それから接吻でしょう。わかつて？」

嘔吐の声。唸<sup>うめ</sup>く声。

「なかなか苦しそうですねえ。苦しみなさい。今年のは毒性が強いから、四時間で発病すると医者と言つたのよ。『四時間』の意味がわかつたでしょう？　ね、これからあなたは、苦しみ抜いて死ぬのよ。電灯をつけましょうか。どうしてどうして、おお、見るも厭だ。あなたが死んでしまつてから警察へ届けるのよ。たとい死体を解剖されたつて、他殺だとは決してわからぬわよ、ホ、ホ、ホ、ホ、ホ」

嘔吐の声。唸<sup>うめ</sup>く声。

死を語るにも暗い方がよい。これも……誰でも知って居ることかも知れない。





# 青空文庫情報

底本：「怪奇探偵小説名作選1 小酒井不木集 恋愛曲線」ちくま文庫、筑摩書房

2002（平成14）年2月6日第1刷発行

初出：「大衆文芸」

1926（大正15）年5月号

入力：川山隆

校正：宮城高志

2010年4月22日作成

2011年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 死の接吻

小酒井不木

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>